研究主題「規範意識を高め、よりよい生活や社会をつくろうとする児童を育む道徳の指導の在り方
―思いやりを軸とした他者との関わりに視点をあてた指導を通して―」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
足立区立東栗原小学校　　教諭　　土生津　静

第１　研究のねらい

学校教育法第 21 条では、「規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度」の育成が義務教育の目標の一つとして規定されている。また、昨今の公共の場での基本的マナーやルールを守れない子供の増加、いじめ等の深刻な問題から、「東京都教育ビジョン（第２次）」（平成 20 年５月）では、規範意識や思いやりの心の育成を重点施策に示している。これは、現在の児童の慣習、約束、きまり、公共心などの規範意識が希薄化していることが懸念されていることへの表れであると考える。児童の規範意識を高めることは道徳の指導における大きな課題である。

そこで本研究では、規範意識は他者と共生し、よりよい生活や社会をつくっていくための基盤となるものであると捉え、他者との関わりに重きを置いた指導に着目した。他者に対する思いやりをよりどころとして規範意識を高める道徳の指導の在り方を追究し、その有効性を検証する。

第２　研究の内容と方法

１　研究の仮説

思いやりを軸とした他者との関わりに重きを置き、自己の行動の在り方を見つめる道徳の指導を行えば、慣習、約束、きまり、公共心を大切にし、場に応じた望ましい行動の選択を行おうとする規範意識をより高めることができるであろう。

２　基礎研究

(1)「規範意識」の定義

文部科学省・警察庁「児童生徒の規範意識を育むための教師用指導資料」（平成 18 年５月）及び先行研究を参考にし、規範意識とは、「所属する集団や社会において、その成員が望ましい行動を積極的に行おうとしたり判断したりする心の動き」と定義した。

(2)「思いやりを軸とした他者との関わり」の捉え方

思いやりとは相手の気持ちを推し量りながら共感的に心を通わせることである。人と接する中で、尊重、寛容、謙虚などの温かい気持ちとして表れた思いやりは、他者との関わりを成立させたり、よりよい状態に発展させたりするうえでの重要な要素の一つであると考える。したがって、本研究においては、他者との関わりは思いやりを軸としていると捉える。さらに、各種文献等によれば、児童が成長していく過程において、他者や集団の広がりと関わりの深まりには発展性があることが明らかであることから、発達段階における思いやりを軸とした他者との関わりについて、右図のように位置付けた。

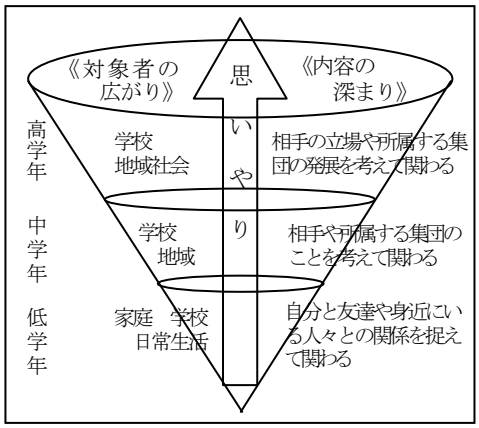


図１　発達段階における思いやりを軸とした他者との関わり

(3)「規範意識」と「他者との関わり」の関連

中央教育審議会答申（平成 19 年）では、「家族や友達、地域の大人たち等とのコミュニケーション等を通じて、社会のルールやマナー、社会的期待を自らの価値観や判断基準へと定着させる」ことの必要性を示している。同様に、中央教育審議会答申（平成 20 年）においても、「他者に共感することや社会の一員であることを実感することにより規範意識がはぐくまれる」ことを明記している。７月に行った児童対象の調査研究の結果では、規範に基づいて行動しようとする意識が高い児童は、意識の低い児童と比べ、他者との関わりを大切にして望ましい行動を判断する傾向にあることが明らかになった。このことにより、「規範意識」と「他者との関わり」を関連付けて指導することの重要性を再確認した。集団や社会の中で自分の行動が及ぼす影響を想像し、他者との関わりを視点として規範の大切さを捉えることで、自ら考え判断し行動しようとする規範意識を高めることへつながると考える。

３　調査研究

右図は、規範に基づいて行動しようとする意識の高い群と低い群それぞれの中で、他者との関わりを意識して行動しようとする割合を表している。児童の調査結果より、どの学年も、規範に基づいて行動しようとする意識が高い児童の方が、規範に関わる場面に直面したとき、相手や集団とした他者との関わりを考えて、場に応じた望ましい行動をしようとする傾向にあることが分かった。

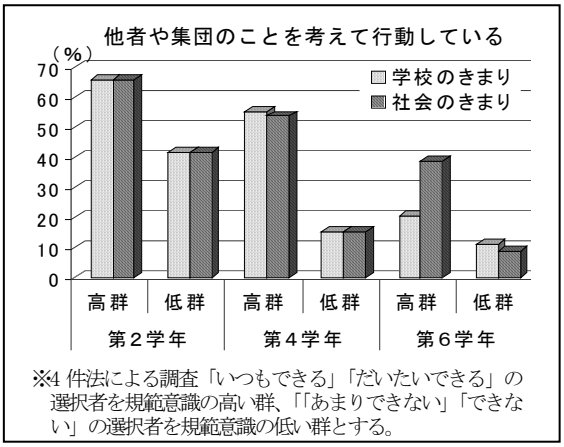


図２　「規範に基づいて行動しようとする力」と「他者との関わり」の関連

４　開発研究

(1)「規範の内面化」を図る手だて

慣習や約束、きまり、公共心を大切にし、守って生活していこうとする規範意識の高まりには、表出した行為だけでなく規範的な行動を促すための規範意識の支えが必要である。この規範意識の支えとは、規範の意味や必要性を理解し、自己の行動を律したり自律的に行動したりしようとする自覚の深まりである規範の内面化である。本研究では、場に応じた望ましい行動を促すために、日常生活や教科等から規範を学習する段階から規範に基づいた行動が表出するまでをつなぐ、規範の内面化に焦点をあてた道徳の指導が重要であると考えた。そして、規範が内面化するための、①規範の存在を意識する、規範の意味や必要性を理解する、規範への実践意欲をもつ、の過程を踏まえ、②それぞれの場面で他者との関わりで規範を捉えるという２つの手だてを講じることとした。基礎研究を基に、思いやりを軸とした他者との関わりに視点をあてた規範の内面化を図る手だてを設定することにより、児童の規範意識をより高めることができると考えた。

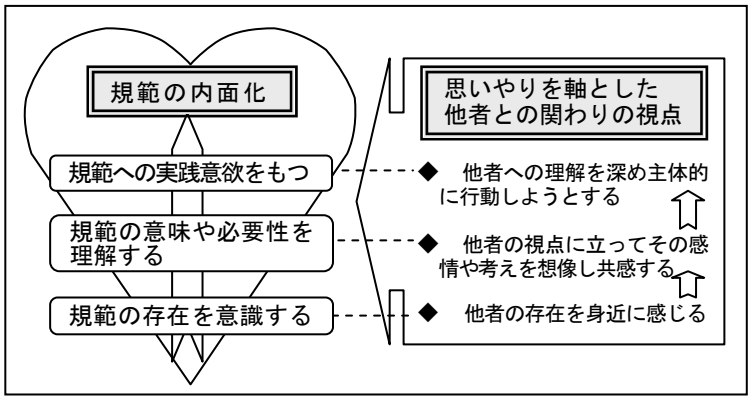


図３　規範の内面化を図る手だて

(2)「規範の内面化」を図る道徳の時間の指導過程

道徳の時間では、資料中の登場人物の気持ちや生き方について考える間接的な他者との関わりと、学級の友達と話し合い、自分の考えや思いを深める直接的な他者との関わりの両面から規範を捉えることで規範の内面化を図る。また、思いやりを軸とした他者との関わりの視点においては、具体的な他者との関わりを位置付ける。このことにより、児童の規範における道徳的価値についての考えや思いを深め、よりよい生き方に心を傾ける道徳の時間の充実につながると考え、規範の内面化を図る道徳の時間の指導過程の開発を行った。

≪日常生活における児童の実態≫
規範に関わる場面に直面した場合、友達の行動に左右されたり自分の気持ちを優先に行動したりする児童の姿が見られる。**【調査研究より】**

≪道徳の時間における児童の実態≫
登場人物に自分を重ね合わせて考えたり、友達の思いを聞き、自分の考えと比べて発表したりする意欲の高まりが見られない。**【調査研究より】**

思いやりを軸とした他者との関わりに視点をあてた規範の内面化を図る指導過程の工夫

事前　児童の規範に基づく行動や他者との関わりにおける実態把握（事前調査）

≪規範の内面化を図る過程≫		≪学習活動≫	**≪思いやりを軸とした他者との関わりの視点≫**
規範の存在を意識する **規範の意味や必要性を理解する** **規範への実践意欲をもつ**	導入	現在の自分 ・自己の見方や考え方への気付き　－自己理解－	・体験や経験を基に、自分の考えや思いを見つめる。
	展開	共感　葛藤 ・資料中の人物の生き方を追求する中で、ねらいとする道徳的価値についての見方、考え方、感じ方の変容や高まり ・他者（友達）の見方、考え方、感じ方の受容 －自己理解－ －他者理解－ これからの自分	**◆　他者の存在を身近に感じる。** ・資料中の登場人物の関係、時間の流れをつかむ。 ・資料を通して、ふだん意識していなかった規範について改めて意識する。 **◆　他者の視点に立って、その感情や考えを想像し共感する。［表現活動の工夫］** ・登場人物がどうしてそうしたのか（しなかったのか）を考える。 ・なぜ守らなければならないのかについて様々な立場から考える。 ・その規範がなぜあるのかについて考える。 ・具体的な場面での対処の仕方について考える。 **◆　他者への理解を深め、主体的に行動しようとする。** ・今までの自分の考えや思い、行動を振り返り、実践への意欲に結び付ける。
	終末	・よりよい生き方への希望 －自己の発展－	・道徳的価値について考えや思いを温める。 ・自分のよさを発見する。

規範の大切さを知る

規範の内面化を図る道徳の時間の指導を通して目指す児童の姿

第３　研究の成果

１　検証授業から見られた児童の変容

規範の内面化を図る過程においては、自己の心と向き合い、これまでの行動を見つめ直し、これからの行動について考える児童の変容が次のように見られた。第一に、「自分のよさを確認、発見する」児童である。自己の行動が他者や周囲にとって心地よい感情を抱かせていたことに気付き、これからもきまりを守っていこうとする更なる意欲をもつことができた。第二に、「自分の未熟さを自覚する」児童である。きまりは守らなければならないことは分かっているものの、守れない原因はどこにあるのか、きまりは何のためにあるのかについて他者との関わりで

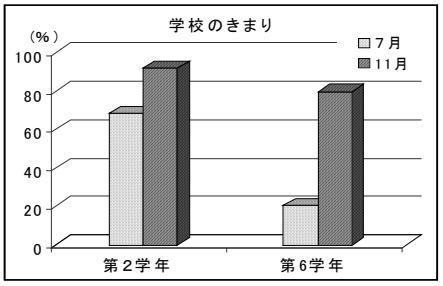
考えさせることで、きまりの大切さを知ることができた。第三に、「きまりに対するこれまでの無意識から意識をする」児童である。きまりを意識せずに生活をしていた、きまりを守ることは当たり前のことと思い考えたことがなかった、振り返ってみると守れていなかった、とした児童は、みんなが気持ちよく、安全で安心して生活するためのきまりを意識することで、望ましい行動を行おうとする意欲が見られた。

第４学年及び第６学年の検証授業の分析

	第４学年「雨のバス停留所で」	第６学年「きょうは自由行動」
規範の存在を意識する	バスが見えたとたん、一番前に並んだ主人公を引き止めたお母さんに対する主人公の気持ちについて、「私は悪くない」「どうして」と自分には非がないとする発言が多かった。しかし「悪かった」と主人公の気持ちを発表した児童から「最初に並んでいた人がかわいそうだったな。」と意見が出ると、周りにはたくさんの人がいたことに気付く児童が現れた。	主人公は、「自由行動だから」と自己の欲求が大きくロボットコーナーに気持ちが傾いている。班の友達を意識しているものの規範の存在を意識していない主人公に共感する発言が見られた。一方「行くところは決まっている」「班で決定したこと」と、みんなとの約束である、班のきまりであることに気付く発言もあり、規範の存在を意識する児童も現れた。
規範の意味や必要性を理解する	【役割演技】 〔子〕何が悪かったんだろう。　〔母〕他の人に迷惑よ。 〔子〕みんなが並んでいたのに抜かしてしまった。 〔母〕分かっていてそんなことをしたの。 〔子〕他の人のことを考えればよかった。	【スケール表】 ・　自由行動なんだから好きなところを見学してもいいはずだ。 ・　班のみんなに断らずに勝手な行動したことは悪かった。 ・　ぼくたちのせいでみんなはプラネタリウムに行けなかった。 ・　自由行動といっても班での自由行動だった。
規範への実践意欲をもつ	《これからの私》（ワークシートより） ・　迷惑かけないようにしよう…21% ・　人のことや気持ちをかんがえよう…19% ・　周りを見て判断しよう…９% ・　きまりを守ろう、△△しよう…42% **○　日常生活を振り返り、みんなが気持ちよく生活していくための慣習や暗黙のルール、社会のきまりに目を向けた。公徳を大切にして生活していこうとする意欲をもつことができた。**	《これからの私》（ワークシートより） ・　相手の立場に立って行動することの大切さを感じた…67% ・　約束やきまりの大切さを感じた…13% ・　これから△△をしていこう…17% **○　自分の権利と同様に他者の権利も守るためにはどうすればよいかについて話し合った。教科等の学習や宿泊学習を振り返り、相手に寛容な気持ちをもつ、気を配るなど他者との関わりを大切にして行動していこうとする意欲が見られた。**

２　研究の結果と考察

第６学年に着目すると、学校のきまりにおいては検証授業前と比べ、60 ポイント増の 80%の児童がきまりを守って生活していると回答している。また、社会のきまりにおいても 36.4%から 71.7%に数値が増加した。第２・４学年においても同様に、検証授業後きまりを守って生活している児童の増加が見られた。検証授業及び検証授業後の児童の変容から仮説の有効性について次のように考察する。



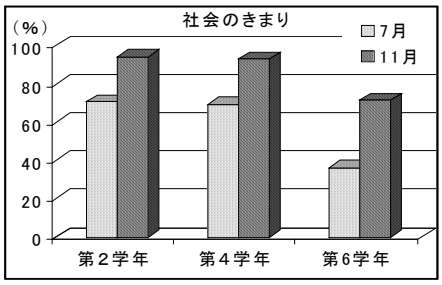


図４　「きまりを守る」ことについて
検証授業前と後の調査結果の比較

間接的な他者との関わりと捉えた、資料中の登場人物の気持ちや生き方について考える展開前段では、児童の実態に応じた表現活動を取り入れたことにより、登場人物に寄り添った共感、葛藤が生まれた。これは、直接的な他者との関わりと捉えた学級の友達との活発な話合いへと発展し、児童の規範に対する考えや思いを深めることに結び付いたと考える。

展開後段及び終末では、自己の心と向き合い、これまでの行動を見つめ直し、これからの行動について考える児童の姿が見られた。こうした児童の姿から、規範の内面化を図る指導過程を通して規範の大切さを知り、意識して生活しようとする児童を育むことができたと考える。

このように本研究を通して、思いやりを軸とした他者との関わりに重きを置き、自己の行動の在り方を見つめる道徳の指導を行うことで、慣習、約束、きまり、公共心を大切にし、場に応じた望ましい行動の選択を行おうとする規範意識をより高められることを実証できた。

第４　今後の課題

○　教科等、体験活動との関連を図った規範意識を高める指導の流れ（補助資料④）を基に、道徳の時間の年間指導計画を作成する。